

## 記憶に残るエピソード



今でも覚えているのは、「望年会」での時代劇です。台本を作って練習し、笑いあり、アクションありで利用者さんに喜んでいただいたことです。



ご利用者との別れは、どの方も深く記憶に残っています。毎回、命の尊さを感じさせられます。



自分自身がその仕事に対してプライドを持って仕事ができると感じています。



看取りが近づき、身体も弱ってきている中でも、ポータブルトイレで排泄しようとしていたご利用者の事は記憶に残っています。出来るだけ意志に沿うようにしました。



結婚前、女性のご利用者から「今、お付き合いしている人いる？」と聞かれ、本当にお孫さんを紹介してくれる雰囲気になりました。やんわりお断りして、その後、女性ご利用者のご主人とのなれ初めや、結婚生活についてお喋りをしました。若かった自分には大変勉強になり、楽しい時間をいただきました。



ご利用者の方の人生の背景を知るのは、興味本位からではありません。その方の性格がどのような所から育ったかがわかり、その方とお話をするときにとても役に立ちます。以前入居されていた少々気難しいUさん。どうしてもお風呂に行きません。その方はロシアに暮らしていたので「スパシーバ、ハラショー」などロシア語で挨拶をすると大変喜んで一緒にお風呂に来てくれました。(ただし、動いてくれない時もありましたが)。その時のニコニコされた顔が今でも忘れられません。



下手ながらも工夫を凝らして歌を歌ったところ、ご利用者が大笑いして下さった事がありました。下手でもご利用者のためを思ってレクを行うと、ご利用者も楽しんで下さるのかもしれない。



下手ながらも工夫を凝らして歌を歌ったところ、ご利用者が大笑いして下さった事がありました。下手でもご利用者のためを思ってレクを行うと、ご利用者も楽しんで下さるのかもしれない。



下手ながらも工夫を凝らして歌を歌ったところ、ご利用者が大笑いして下さった事がありました。下手でもご利用者のためを思ってレクを行うと、ご利用者も楽しんで下さるのかもしれない。



あるご利用者の方が旦那さんを亡くして落ち込んでいた時、食事あまり食べず、居室に閉じこもっていることが多くなっていました。仕事を終えて、そのご利用者の方の居室に伺い、お話をしました。「悲しいわけじゃないの」「でも元気がでない」と言っていて、話を聞きながらだんだんと元気になり、お孫さんの話をして「元気出さなきゃ駄目ね」と話しました。



普段は認知症の症状ですぐ最近のことも忘れていしまうご利用者でも、行事などで、踊りや歌、料理をする際は身体に染みついており、動作等がなめらかに行えているのを見ることが出来た。



日々の中からご利用者のニーズを聞き取り、計画を立てて、利用者と一緒に出掛け、おいしいものを食べて喜んでくれた顔が記憶に残っている。



失敗した事をご利用者に励ましてもらった時は、記憶に残り、同じ失敗をしないように！と常に考えるチャンスを与えてもらったと前向きに思うようにしています。



ご利用者の方に、夜中「お水が飲みたい」と言われ、ご用意したところ、「裏の川の水だね。冷たくておいしいね。」ととても美味しそうに飲まれていました。ご利用者の方の素敵な生活の思い出を感じることが出来ました。



ご利用者の方に、夜中「お水が飲みたい」と言われ、ご用意したところ、「裏の川の水だね。冷たくておいしいね。」ととても美味しそうに飲まれていました。ご利用者の方の素敵な生活の思い出を感じることができました。



忙しいイメージがある仕事だが、利用者との小外出もできる。外での反応は普段見せないようなものもあり、喜んでもらえる。



失敗した時の事が記憶に残っています。そんな時に先輩や同僚に励ましてもらって、次回からは同じ間違いはしないように、と前向きな気持ちになることができました。



ご利用者やご家族の方から「ここ来るとあなたと話せて、顔が見られることが嬉しくて、いつも楽しみ。」と言っていたことがとても残っています。



とても気難しく要望が多いご利用者でしたが、素直な気持ちで静かな心で対応していたら、段々と心を開いていただき、優しい言葉をかけてくださいました。自分の気持ちを常に冷静に保たなければ上手な介護はできないと思いました。



とても気難しく要望が多いご利用者でしたが、素直な気持ちで静かな心で対応していたら、段々と心を開いていただき、優しい言葉をかけてくださいました。自分の気持ちを常に冷静に保たなければ上手な介護はできないと思いました。



ご利用者が「家に帰る」と言って玄関から出て行こうとされていたので、近所をひとまわりしたら納得されるだろうと思い、一緒に外へ出ましたが、30分近くも歩き回ってヘトヘトに。途中倒れてしまうのではないかと心配しましたが、無事にホームに戻れてホッとしました。



ご利用者が、ご自身の生活を自分らしく送りたいという気持ちを示してくれた時に嬉しく思います。



ご利用者がいつもと違う様子だと気付いて、その後、入院になったと知った時は身近に接している介護士しか気付けないことだったのかなと記憶に残っています。



始めてエンゼルケアをさせて頂いた時のことが心に残っています。ご遺体を見るのも、触るのも初めてでとても緊張しました。丁寧に体を拭いたり、洋服を着替えたり、化粧をして、ただ眠っているだけの様な穏やかな表情になり、温かく送り出す事ができました。ご利用者の終の棲家として、最期まで安心して過ごして頂けるよう、日々の業務の中で心がけていこうと改めて思える仕事になりました。



静岡県出身のFさん。幼いころに実の母親に先立たれ、その後父親が再婚した相手とはうまくいかず、小学校を卒業するかしないかで家出。その後、土木関係の仕事を何回も変わりながら続け生涯独身。70歳前に脳梗塞をおこし、左半身の思い麻痺が残っていました。その方を食後に居室にお連れした時に陽の光が窓から一杯さして、私が「すごくきれい」というと、Fさんは「ああ、きれいだな!!今日も良い日になるぞ」と力強く仰いました。忘れられない空と声です。



「あなたが異動になるなら、ショートステイも異動先の施設に変更したい」と言っていたが、実際ご利用いただきました。精一杯対応したことで評価していただいたと思い頑張っていこうと思いました。



新人のころ、ご利用者と喫茶店や飲食店に時間を作っては行っていた。そのころは職員が多かったので、ご利用者の喜ぶ姿を見ていると、仕事とはいえ私自身も楽しく充実した時間を共有することができた。また、時間を作って皆で笑顔で楽しみたい。



望年会で「目黒のさんま」の時代劇に手品をまぜ行ったことがとても印象に残っています。担当でさんまの絵を書き、かぶりものをし、利用者の方に笑ってもらえ、やってよかったと思いました。



介護士3年目の今でも覚えている記憶……自身の大切なものをしまっ  
てしまふあるご利用者の話し。ある時、杖が無くなってしまい、フロアを皆で探  
したが、見つからず、数か月後、健康診断のため食堂パーテーションを開  
けたらそこに杖が！誰も開けないところにしまい、もちろん認知症のためし  
まった所を忘れてしまったのだが、大切なものを大事にしようとしたご利用  
者の気持ちと行動力にびっくりさせられました。